学籍番号：194007　　名　前：遠藤里桜,RioEndo
研 究 室：中村研究室

2022 長岡造形大学 美術・工芸学科 クラフトデザインコース　卒業研究Ⅰ

研究テーマ　　【ガラスを通じた自身の青春記憶の表現】

1　制作意図および概要

研究動機

本研究を思考するにあたって、まず私は自身の作品を振り返ることから始めた。思い入れが強い作品を並べる中で、私は一つの共通した要素に気がついた。多くの作品のコンセプトに、時の流れに着目した要素が含まれているのだ。時の流れは実体があるモノとして認識することは出来ない。だが、私は実体あるモノを考える上で、流れ続ける時の中でのモノの在り方を、無意識のうちに重要視して作品を制作していた。この矛盾が面白く、実体はないが存在しているモノ、時に着目し、今回研究を進めたいと考えた。

そもそも、時とはなんだろう。スマートフォンを見れば、簡単に現在の時刻を知ることが出来る。しかし、それはあくまで媒体を通して数字を認識しているだけで、本当に時を認識しているとは言えないのではないだろうか。時とは、数字一つで表現できる様なモノではないはずだ。ミヒャエル・エンデ著作、『モモ』ではこのような言葉が出てくる。「光を見るためには目があり、音を聞くためには耳があるのとおなじに、人間には時間を感じとるために心というものがある。」私は、この言葉に強く共感した。時とはそこに人の心が存在するからこそ生まれた概念であり、常に人と共にあるものだと私は考える。そこから、私は人間が肌から、匂いから、視覚から感じる時に着目した。人間が感覚的に感じる時の経過は、とても尊いものだと私は思う。時を感じ、その瞬間の美しさを噛み締めている内にその時は終わっていて、世界はまだ見ぬ先の景色に姿を変えている。そして私たちはまた新しい瞬間に胸をときめかせるが、そのうち私たち人間も実はその変わり続ける景色の一部だったのだと気づく。人間が感覚的に感じる時の一瞬の美しさやその記憶の儚さ、また、永遠に流れ続ける時の果てしなさが、私が時に魅力を感じる理由ではないだろうか。

青春記憶との遭遇

研究を進めるにあたり、自身の大切な経験を述べたい。実習での経験だ。私は教職課程を取っており、去年の夏の終わりに母校である中学校に実習に行った。卒業研究に関してこの段階では、時に着目する、ということだけが決まっていた時だ。そこでおよそ６年ぶりに母校に足を踏み入れたのだが、その際、何故だか無性に泣きたい気分になってしまった。これは言語化できるような単純な感情によるものではない。肌から、匂い

から、視覚から、懐かしいものに触れたことで自分のかつての記憶が一気に蘇り、言い表せない強い感情がこみあげてきたのだ。この感情は言い表せないものであるが、決して悲しいものではなく、確実に心が満たされる感情ではあった。中学生の頃の私とその周りの人物や風景は今の私にとってとにかく眩しい存在であり、言うなればあれが“青春”だったのだと思う。嫌な思い出も数え切れないほどあるはずなのだが、実習中に中学生時代を振り返りまず１番に脳内に浮かんだものは、断片的な当時の煌めく思い出たちだった。

私はこの経験から、自分の記憶が何かをきっかけに蘇っていく感覚を体感し、同時に当時の記憶を“青春”という言葉で青いフィルターをかけて美化している自分にも気がついた。私はここで、瞬間の美しさやその記憶の儚さ、永遠に流れ続ける時の果てしなさを改めて感じた。記憶は時が経つにつれて段々と脆く、曖昧になっていくものだが、一部の記憶に関しては記憶を思い出す過程で無意識のうちに変化してしまうらしい。特に、中学時代は私にとって " 青春 " に該当する記憶であるため、この変化が自身でも気がつくくらい分かり易かったのだと思う。私は自分にとっての“青春”を振り返ったことにより、記憶が蘇っただけでなく、記憶の成り行きの面白さを改めて体感した。そのため、卒業制作では、青春を振り返った今の私が考える、自身の青春記憶の表現を行いたいと思う。

表現について

曖昧にバラバラになった思い出達が、あることをきっかけにあたかもずっとそこにあったかのように一つの記憶として存在している様子の表現として、モチーフに私は瓶を選択した。記憶について考えるうちに脳内に浮かんだものが、ボトルメールや、タイムカプセルの瓶であったからだ。ボトルメールやタイムカプセルは、中に想いや思い出を封じ込めるものだ。内部に封じ込められたものたちは変わっていないようで、実はその思い出を封じ込めた本人の変化、また、外部の変化によって、少しずつ中のものたちの存在価値も変化していく。変わっていないようで確実に変化は起こっているが、その変化も含めて魅力的、これはどこか記憶と通じる部分があるように感じる。このようなことから、瓶が記憶や時を想起させる物体として適しているのではないかと考えた。また、曖昧にバラバラになった思い出として、私は割れたガラスの破片を連想した。脆さがありつつもそれぞれが美しく輝くガラス達が、私の青春記憶と重なる部分があると感じたのだ。この破片を青色のガラスで繋ぎ、瓶の形に合わせることによって、中学生時代を振り返った自身の青春記憶の表現に繋がるのではないかと考えた。瓶は自身の内面に存在する記憶として制作するものであるため、工業製品の瓶ではなく自分自身と向き合いながら思うがままに形を思考し、自身が実際に触れながら粘土で原型を制作していく。

２　研究課程

①　破片制作

まず吹き技法で小さな瓶を制作する。瓶を制作した後、通常であればここで徐玲炉にガラスを入れ除冷の工程に入るのだが、ここでは除冷の工程には入らず、そのまま熱いガラスに水を掛ける。すると温度差でガラスに亀裂が入り、大小様々な破片ができる。曖昧にバラバラになった記憶として破片を制作しているため、どの瓶からできた破片なのかなどには拘らずに破片を保管する。

②　焼成手順

破片を瓶の形状にしていく。手順は以下の通り

１．回転体を使用し、瓶の形の粘土原型を制作。縦半分に切った後、石膏で型を取る。

２．１回目の焼成。石膏の型にパウダーガラスで繋ぎながら破片を敷き詰め、瓶の形状を片面ずつ制作。

３．２回目の焼成。片面形状の瓶を、パウダーガラスで繋ぐ。

③　１つ目の制作

画像１

瓶の形の粘土原型を回転体で制作し、半分に切った後、石膏で型を取る。蛍光灯リサイクルガラスのパウダーとフュージングノリ、さらに寒色のガラスパウダーを混ぜ、破片どうしをくっつけるための繋ぎを制作する。今後、これを繋ぎガラスと呼ぶものとする。石膏の型に繋ぎガラスで繋ぎながら吹きで制作した破片を敷き詰めていく。これを焼くことによって、繋ぎガラスが溶け、破片同士がくっつく仕組みだ。トップ 700℃15 分キープで焼成する。（画像１）

２回目の焼成に入る。ここでまた繋ぎガラスを制作するのだが、ここでは、蛍光灯リサイクルガラスのパウダーではなく、低温度で溶けるクリスタルガラスのパウダーを使う。既にできた片面ずつの瓶の形状を大きく変形させないようにする為だ。これによって、間の接着面だけが溶け、くっつくのではないかと考えた。石膏で支えを作り、トップ 660℃15 分キープで焼成。（画

画像２

画像３

像２）その結果、接着面のクリスタルガラスは溶けたものの、焼成温度が低いためフュージングノリが焼けきらず、灰色に変色してしまった。それに加え、焼成温度が高すぎたのか、細い部分から変形してしまった。（画像３）

④　２つ目の制作

前回の試作品を使用しながら変形と変色、両方に着目し何回か実験的に焼成を行ったが、やはり変色と形状のことを考えると、前回の問題は、温度調節だけでの解決は出来ないことが分かった。高温度で焼成することによりフュージングのりの変色を防ぐことはできるが、前回以上の高温度で焼成するとどうしても変形してしまうからだ。そのため、次の制作では、片面ずつできたものをくっつける過程までは前回と同様に、２回目の焼成では変色を防ぐためにフュージングノリを入れず、クリスタルガラスと色パウダーに水を混ぜ、焼成することにした。また、クリスタルガラス自体は 640℃で溶けることが分かっている。変形を防ぐためトップの温度を前回の 660℃から 640℃に下げ、トップ 640℃15 分キープで焼成した。その結果、両脇からの抑えが足りずに隙間が空いてしまったものの、色は灰色になる事なく焼くことができた。（画像４）しかし、同様蛍光灯リサイクルガラスとクリスタルのガラスの発色の違いなのか、ノリを含んだことによる発色の違いなのか、写真では分かりにくいが繋ぎガラスの色が１回目の焼成部分と２回目の焼成部分で変わってしまったことが気になる点として浮上した。

画像４

⑤　３つ目の制作

１回目の焼成部分と２回目の焼成部分で色が変わってしまう問題点を解決するため、１回目の焼成、２回目の焼成に関わらず、全ての繋ぎガラスをクリスタルガラスに変え、接着する際に少しの苦労があるものの、全てフュージングノリを使わずに接着する制作方法に変えた。また、全ての繋ぎガラスをクリスタルガラスに変えたため、１回目の焼成温度をそれに伴い低い温度に変更する。しかし、ひび割れたガラス破片の強度のことも考え、２回目の焼成よりも少し高い温度、トップ 660℃15 分キープで１回目は焼成する。２回目の焼成に関しては、前回と同様のトップ温度とキープ時間で焼成する。また、前回は接着部分が空いてしまったため、前回よりも支えに重みを足し焼成し

画像５

画像６

た。（画像５）結果、全てをクリスタルガラスに変更したため１回目の焼成部分と２回目の焼成部分で色が変わることはなかった。だが、形に沿っていない支えに重みを足したせいか、隙間は空かなかったものの反対に少し潰れた形状になってしまった。（画像６）

⑥　４つ目～５つ目の制作

今までの制作では、いずれも２回目の焼成で多少なりとも変形してしまった。この問題を解決するため、今までは２回目の焼成の際に瓶にピッタリと沿っていない形の支えで瓶を両脇から支えでいたが、１回目の焼成で使用した石膏型を加工し、２回目の焼成の際に再利用するという形をとった。その結果、瓶の下部はある程度の形を保って焼くことができた。しかし、１回焼かれた石膏は脆く上手く加工できないため、上部に支えを作る事ができず、３つ目４つ目と共に変形してしまった。（画像７）

３つ目

４つ目

画像７

⑦　変形についての考え方

ここまで制作し、変形について自身の中で考えの変化があった。２回目の焼成で変形してしまうことが自身の中で長らく問題点としてあったのだが、出来上がった瓶を見ていると、曲がってしまった瓶たちにむしろ愛おしさを覚え、自身の手が及ばない所でのガラスの変化に、知らぬ間に変わっていく自身の青春記憶との繋がりを感じた。そのため、曲がった形状を強い問題点としてではなく、青春記憶の表現の１つとして扱っていこうと思う。ただ、やはり曲がっているものは曲がっていないものがあることによってその意味が明確になるのではないかと思う。そのため、曲がることが強い問題という認識では無くなったものの、以後制作する瓶は、今まで以上に曲がらないように思考し、制作していく。

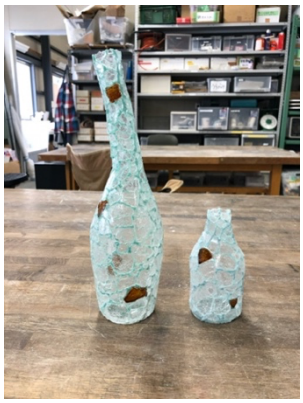
⑧　ガラス以外の異素材についての考え方

また、ここで今までに制作した瓶を見返すことによって、自身の中で新たな気づきがあった。曖昧にバラバラになった思い出達があることをきっかけにあたかもずっとそこにあったかのように一つの記憶として存在している様子の表現、として瓶を制作してい

たが、今までに制作した瓶はそれぞれバラバラになった思い出が一つの記憶になると言うよりかは、一つの出来事がバラバラになりまたぴったり再構成されている、そのような見方もできてしまうのではないかと考えたのだ。本研究は記憶の成り行きに面白さを見出し始めたものでもあるため、これでは自分が思うような表現ができていないのではないだろうか。そう考え、瓶を構成する段階でガラスの破片だけでなくガラス以外の素材を混ぜて制作する方法を考えた。そうすることによって、蘇る段階で記憶が変化している、その要素を強めることができるように感じたのだ。異素材として、陶器の破片と金液を混ぜ込むことにした。友人が制作した陶器の破片、見ず知らずの人間がネット上のフリマサイトで出品していた陶器の破片、これらは、知らず知らずのうちに自分以外の人間から影響を受けて変化した記憶としてガラスに埋め込む。金液は、自らが"青春"というワードから勝手に記憶を塗り替えた、美化の対象として塗ることにした。

⑨ 金液について

既に制作した瓶に、金液を塗っていく。金液はそのままでもガラスに塗ることが出来るが、筆跡が強く出てしまうのを避けるため、溶液で濃さを調節した後、液を塗った。瓶が変形しないよう、560℃10 分キープで焼成する。焼成することにより、べっ甲色の液が金色に変わる仕組みだ。



⑩ ６つ目の制作

画像８

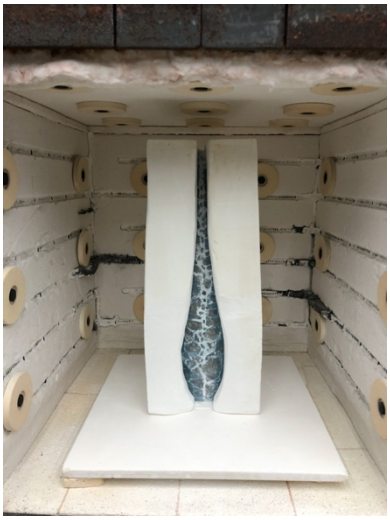
画像９

６つ目の瓶から異素材である陶器を合わせて焼成していく。陶器とガラスの膨張率は異なっているものの、異素材と破片のガラスを隣り合わせにして焼成した場合も、繋ぎガラスがクッション材となり破片が割れずに焼成できることが事前実験によって分かった。そのため、１回目の焼成の段階で異素材を混ぜて焼成する。（画像８）また、変形に関して、４つ目、５つ目の制作では、１回目の焼成で使用した石膏型を２回目の焼成で再利用、瓶の形に沿った支えで焼成するという方法をとったが、いずれも変形してしまった。１度焼

いた石膏型は脆く、上手く加工できないことが問題であったと思う。そのため、６つ目の制作では石膏型を再利用するのではなく、粘土原型を２つ制作し、石膏型を２回目の焼成用に新しく作るという方法をとった。また、窯内で上下に発生してしまう温度差により上部が変形しがちであったため、石膏型を加工し上部は温度が伝わりにくく、下部は温度が伝わりやすいような形状にした。（画像９）トップ 640℃分 10 キープで焼成する。その結果、変形することもなく、破片同士がくっついた。形状が小さいため変形しにくかったということもあると思うが、今後はこの制作方法で制作していく。（画像１０）

画像 10

⑪　７つ目の制作


画像 11

６つ目の瓶と同様、陶器を混ぜて焼成していく。２回目の焼成までは前回と同様に制作し、２回目の焼成時に使用する石膏型も６つ目の制作と同様に新しく作る。６つ目の経験を活かしさらに温度差が出ないよう、工夫をして石膏型を加工する。（画像１１）前回の瓶はくっついたものの周りに石膏の支えがあったため熱回りが悪く、接着部分のガラスが溶けきっていないように感じた。これ以上温度を上げると瓶が変形してしまう恐れがあったため、窯の中の様子を見ながらキープ時間を調節する。トップ 640℃10 分キープで焼成。しかし、焼成している最中に窯内を見たところ接着面のガラスが全く溶けきっていなかったため、トップのキープ時間をまた更に 20 分伸ばすことにした。しかし、段々と隙間が空いてきていることが確認できたため、合計２５分キープした時点で徐冷の段階に入った方が良いと判断し、温度を下げた。釜から出した瓶を見ると、陶器破片と隣同士のガラスに大きなヒビが確認できた。溶けきっていないところはあるものの、もう一度焼成した結果粉々になる可能性を考えると、もう一度焼成することはリスクが高すぎると感じた。そのため、これ以上の焼成はしない。６つ目の瓶では間が開かなかったにもかかわらず今回の瓶では間が開いてしまった理由として、大きな瓶であったが故に少しずつ形が合わなくなり、石膏の支えと瓶の間に隙間ができてしまったことが理由なのではないかと考えた。まだ制作を続けようと考えているため、この経験は次の制作に活かす。

⑫ 制作を通して

本研究を始めることになったきっかけは実習の出来事ではあるのだが、制作を進めながら自身と向き合う中で、また新たな青春記憶が蘇る、ということが何回も起こった。記憶が蘇る、という自身の内部での動きを卒業研究以前の生活では深く意識したことがなく、間違えても視覚化などには及ばなかったのだが、制作を始めてからは記憶が蘇ったことを体感した際、思い出の破片たちを繋いで記憶として存在させる、この風景が脳内に自然に浮かぶようになり、今まで自分が深く気に止めることがなかった記憶が構成されていく様子が自身の中で実際に視覚化されていくことが、大変興味深いと感じた。また、このような経験を通して以前より記憶を尊いものとして強く認識するようになり、制作を通して思い出した青春記憶を自分の中にしっかり残すよう、忘れないよう、気にかけるようになった。しかし、このたった数ヶ月の間でも時が流れるにつれて段々と記憶がぼやけてしまい、人間の意識だけではどうすることも出来ない、記憶の成り行き、そして儚さを改めて感じた。

4　まとめ

卒業研究以前の私は、自分が脳内に描いている通りにガラスが変形しないことに強い焦りやマイナスな気持ちを抱くことが多く、そのようにしてできたものを全て失敗とみなしてしまう傾向があった。しかし、本研究を通して、ガラスの制作過程における偶然性を自身の記憶に近しいもの、愛おしむものとして認識することができた。また、かつては見栄を張って見せかけのかっこよさを求めてしまう事が自身の制作に向かう姿勢としてあったのだが、本研究では毎日の制作や自身の思考を文章化する経験を通して、見せかけのかっこよさを求める自分は本研究を進める上で気にするべきでは無い存在だと気がつくことが出来た。本研究における作品は、ありのままのぐちゃぐちゃな思考で紆余曲折しながら制作したものばかりだ。しかし、それこそが自分自身の本来の姿が現れているモノだと、今の私は作品と自分自身を愛おしみながら認めることができる。

本研究では中学時代を振り返ることによって蘇った青春記憶の表現を、ガラスを通じて行ったが、何年後かには今の私の日常も青いフィルターがかかった状態で自らの前に現れたりするのかもしれない。時は流れ続けるが、記憶は変わり続けながらも私たちのどこかに、確かに存在している。何年後かの私がこの文章を読み返した時、そこでの私は何を思うのか、楽しみだ。

引用

ミヒャエル・エンデ著、大島かおり訳『モモ』岩波書店，2010 年，p236